

これが私の指導法

～知的財産の継承～



淳城西小学校

平塚定

導入に身近な問題を提示して、算数の授業が始まる。問題の内容や提示する方法によって子どもたちの思考が変わってくる。

の提示授業では、問題文中の数や不等号を○や□に置き換えて提示した。「一部を○や□にした効果で、「整数だつたら」「小数だつたら」などと、既習の計算を思い出しながら具体的な数を用いて思考実験が始まった。「まだ学習していない数は何だろうか」と問うことで、「分数でも同じことがいえるのだろうか」と問題が焦点化され、課題意識が高まつていった。

四年わり算の筆算の導入では、次の問題を扱う。「八十枚の色紙

「を四人で同じ数ずつ分けます。一人分は何枚になりますか。」この問題を、「□枚の色紙を四人で分けます」とだけ板書して提示した。すると、「同じ数ずつ分けないと枚数がばらばらになる」と、等分除の見方が顕在化してきた。さらに、「十五枚だと余りそうだ」「二十四枚だと分けられる」などと、数感覚に基づいて具体的な数や式がイメージ化された。そして、「このままだと何を求めるか分からない」という気付きが引き出され、□に入る数が八十であることを伝

えた上で、後半部分を子どもと一緒に書き加えて問題を完成させた。こうした導入でのやり取りをテンボよく進めることで、問題場面がよりよく理解され、課題づくりにつながっていく。

教科書の教材に、子どもの実態に応じてほんの少し手を加えるだけで、問題解決学習の展開が変わるのである。効果的な方法は、様々な単元に応用が期待できる。まずは、問題提示の工夫から授業改善に取り組んでみてはいかがだろうか。

編 集 後 記

今年度も東京都豊島区をはじめ、宮城県登米市等との教育交流・視察が行われています。今月は北海道白老町から視察があります。同町では今年「能代会」という研究会の自主サークルが誕生しました。きっかけとなつたのは、これまでの能代への視察訪問。授業参観等から「熱を抱いた」教員が中心となつて組織されたとのことでした。能代市各校の実践がこうした形でも実を結んでいることに驚き、大きな喜びを感じました。(M)

